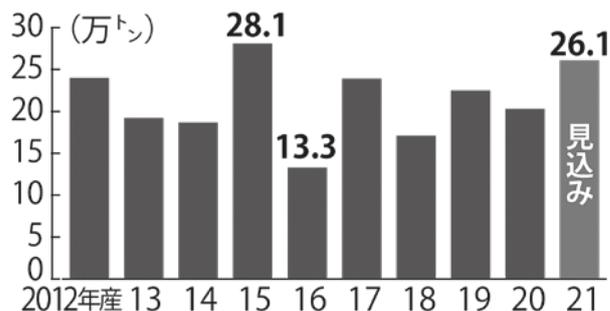


ール当たり取扱量約7.0トン)を上回るなど、近年でも極めて良い粒の多さとなった。

収穫期に雨が続きと品質は下がるが、7月下旬から8月上旬にかけては極端な降雨もなく、作業も順調に進行。「製品歩留まりは9割以上を確保。等級もほぼ1等級で良い出来」(帯広支所)とし、「品質面でみても、タンパク値も例年より低く、高品質の小麦になった」(同)とする。

ホクレンが取り扱う管内21年産の作付面積は3万6,700ヘクタール。前年よりも200ヘクタール多かった。全道の34.3%を占めるなど、地域別では最も多い。前年秋に種をまく秋まきと、春まきがあり、秋まきが99%以上を占める。

◆ホクレンの十勝産小麦取扱量



酪農・畜産

搾乳ロボ導入 十勝117戸 全道382戸
道農政部調査 規模拡大で積極投資 地区別最多

2021年3月6日

道農政部は、道内での搾乳ロボットの導入状況などをまとめた「新搾乳システムの普及状況」を公表した。搾乳ロボを導入している農家は前年から83戸増えて382戸、うち十勝は31%に当たる117戸と地区別では最も多かった。規模拡大が進む中、省力化を見込んで積極的な投資をしている様子が見える。

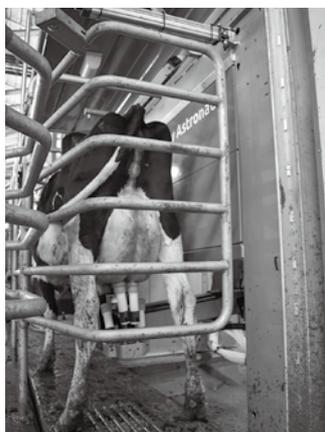
2020年2月1日現在で、道内の搾乳農家5311戸に調査。同年12月下旬に結果を公表した。

搾乳ロボが道内に初めて導入されたのは1997年。労働力不足への対応から、作業を省力化する機械の導入が進んでおり、その後も毎年10戸程度で導入が進んだ。2014年度は全道で150戸だったが、15年度以降は畜産クラスター事業などの活用で導入が加速。約5年で導入戸数が倍以上に増えている。

今回の調査では、十勝管内の導入農家は前年から18戸増加。2位は根室(90戸)、3位はオホーツク(60戸)で、100戸以上で導入しているのは十勝のみとなっている。搾乳農家数からみた割合も、十勝(1113戸)は10.5%で最も高い。

十勝は規模拡大に意欲的な農家が多く、積極的な投資が図られている。搾乳ロボを導入している市内の酪農家は「労働力、労働時間削減の面で(ロボット導入の)効果を実感している」と話す。

道農政部はフリーストール牛舎・ミルクパーラーの導入についても



十勝を始め、全道的に導入が増えている搾乳ロボット

調査。ミルクパーラーは主にフリーストール牛舎で導入される。人が動いて搾乳するつなぎ牛舎と比較し、まとめて搾乳ができるなど効率が良く、大規模経営で採用されている。

◆フリーストールの普及率も道内最多

フリーストール・ミルクパーラーいずれも導入しているのは全道で1,578戸(普及率29.7%)。十勝は481戸(同43.2%)に上り、戸数、普及率とも全道で最も高かった。

同部は「十勝では酪農家が大規模経営を行っていることを表している。搾乳ロボットについては全道的に導入が続いている」としている。

